

会 議 記 録

高松市附属機関等の会議の公開及び委員の公募に関する指針の規定により、次のとおり会議記録を公表します。

会議名	第1回高松市創造都市推進懇談会（U40／第4期）
開催日時	平成31年2月4日(月) 18時30分～20時30分
開催場所	市民交流プラザIKODE瓦町
議 題	(1) 会長・副会長選任等 (2) U40プロジェクト事業報告会
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 一部公開 <input type="checkbox"/> 非公開
上記理由	
出席委員	徳倉会長、穴吹副会長、中村かおり副会長、大石委員、大崎委員、大美委員、熊野委員、桑村委員、笹川委員、田中委員、瑞田委員、中村香菜子委員、西谷委員、眞鍋委員、宮井委員、若林委員、渡邊委員
市職員	小籠、長谷川、森、上原、武田、田村、美濃、杉原
事務局	大西市長、加藤副市長、松下副市長、佐々木局長、長井参事、田井部長、西岡課長、佐野補佐、三浦係長、松下
傍聴者	議題(1) 1人 (定員 5人) 議題(2) 24人 (定員 100人)
担当課及び連絡先	産業振興課 創造産業係 839-2411

審議経過及び審議結果

- 1 開会
(事務局から開会挨拶)
- 2 事務局説明
(事務局から第4期U40について説明)
- 3 自己紹介及び会長・副会長の選任
 - ・出席委員及び市職員U40が自己紹介
 - ・大美委員が徳倉委員を会長に推薦し、賛成多数で承認

【会長】

皆さんありがとうございます。改めましてこんにちは。引き続き第4期の会長を務めさせていただきます。最後の2年間をもう一花咲かせるつもりで頑張りたいと思っています。新規の方はこれから7時から事業報告会がありますが、こういうことをしていたのだなと把握していただき、まったく同じことをする必要はなく、第4期は第4期で皆さんのアイデアを出しながら

審議経過及び審議結果

ら、創造都市とはどういうものなのかというのをU40のなかで、みんなで話し合いながら形作っていければいいなと思います。ぜひ、積極的に参加をしていただいてより良いものにしたいと思うので、ご協力のほどよろしくお願いします。

- ・徳倉会長から穴吹委員、中村かおり委員を副会長に指名

(副会長からそれぞれ挨拶)

(U40プロジェクト事業報告会会場へ移動)

4 U40プロジェクト事業報告会 (事務局から報告会開会の挨拶)

【会長】

みなさん、こんばんは。U40では第3期、先ほどから第4期がスタートし、その会長を務めております徳倉です。また、任意団体 upTAKAMTSU の会長もさせていただきます。

普段、私は割と長く喋るタイプですが、今日は面白く喋るところがなく、しかも2分ぐらいしか時間もないということで、2分をどうまとめるかと思っています。U40は、我々40歳以下のメンバーが集まって、高松市をより創造都市という掲げた目標にどういう風に近づけるか知恵を出し合って、第3期は2年間をかけて、これから元プロジェクトリーダーの4名が発表しますが、それぞれ事業を作り上げて、今日このように事業発表会を行わせていただくことになりました。市長を始め、市の皆さん、そして今、前列に座っている第3期、第4期。そして第1期、第2期の先輩方も含めて、多大なご協力をいただきながら、様々な事業を行うことができたことを、この場でお礼申し上げます。この第3期報告会も実際にこんなに人が来るとは思っていませんでした。前列7人ぐらいだったらどうしようかと思っていましたが、市の各部署の皆さんに一般の方々も含めて、かなり多くの方が来ておられ、メディアの方も来られている。それぐらいこのU40の事業、第3期でやらせていただく中に、「何か高松市で面白いイベントが立ち上がっている、何か面白いことをやっているというときに、必ずU40が関わっているね」とある記者に言われたことがあります。そこは、ひとつやらせていただけて良かったなと思っています。様々な紆余曲折があったり、乗り越えなければいけない壁はあったりしましたが、市のメンバー、また民間のメンバーが力を合わせて、ここまでの事ができるというのが一つ形になって皆さんにご披露できるのが、非常に会長として嬉しく思っているし、ここにいるメンバーだけではなく、総勢30人弱のメンバーでさせていただいた一つ一つの事業を、丁寧に発表させて頂きたいと思っています。皆さんも何か触れる部分があると思うので、ぜひ聞いていただいて、U40はこんな事業をしていたよと。第3期は終わりますが、今日から第4期がスタートします。新しい船出に向けていい記念になればと思っていますので、よろしくお願いします。

【事務局】

ありがとうございました。それでは、各事業の報告に移ります。始めに、パラ陸上事業の成果報告についてお願いします。

【委員】

こんばんは。先ほど、会長からもありましたが、こんなにたくさんの方が来るとは思わなくて、そして前回はそうでしたが、毎回私がトップバッターで、結構緊張しているのですが、今回、メンバーの思いを背負って私がプレゼンをさせていただこうと思うので、皆さん寝ないように集中して聞いてほしいです。

それでは、パラ陸上事業についての報告をさせていただきます。

私たちのプロジェクト内容としては、第29回パラ陸上競技選手権大会が昨年9月に開催されました。私たちはこのパラ陸に向けたスポーツボランティアの養成講座というのを一つ。それからバリアフリーマップの作製・配布というのが2つ。この大きな2つのものをやりました。

スポーツというのは、3つの軸があります。まず、する人、Do Sports。2つ目が見る人、See Sports。3つ目が支える人、Support Sports。この3つが大きな主軸になっています。皆さん「する人」、「見る人」はやったことがある人がいると思いますが、「支える人」。皆さんオリンピックとかを見ると思いますが、「サポートする人」はすごく多く必要です。今後日本の中でスポーツがもっと盛り上がっていくには、サポートする人の力が必要になってきます。その中で関わる人を増やすことで、大会を自分ごとにする、見に来てくれる人はもちろんだが、支える人を増やすことで、自分がどの部分で関われるかを増やすことで、大会を自分ごとにするという目的を掲げて、今回、事業を行いました。プロジェクトの期間は結構長くやりまして、まず、2017年の11月から2018年の3月までボランティア講座を月1回開催しました。次に、2018年5月から8月までがバリアフリーマップの作製に取り組み、そのあと、8月～9月はバリアフリーマップの配布と設置を行いました。この一連の流れが全てに繋がっているプロジェクトだと把握していただきたいです。

まず、パラ陸に向けたスポーツボランティア養成講座。これは2018年9月に開催されたパラ陸の開催にあたり、開催地として興味を持ってくれる人、関われる人を増やすことを目的としました。全5回、延べ参加人数が54名。内容はただスポーツだけではなく、ボランティアをする上でのコミュニケーション講座やまちのことを知る講座、あとはチームワークについて。それからパラアスリーの田中選手にご協力いただき、パラアスリートから大会はこういところ、見どころなどを説明して頂きました。私たちが感じた効果は、元々例えば、スポーツだけなら集まる人が違うが、スポーツに興味がある人、地域に興味がある人、ボランティアに興味がある人、この3つのどれかに関わってくる人が参加することで、今までにはない新しいコミュニティができたことは大きな結果だと思えます。それから、大会に興味を持って貰ったこと、あとは自分のまち、受け入れ側となった場合に、自分の住むまちを知らないといけないので、自分の住むまちに興味関心を持って貰うことが出来たのも大きな結果だと思えます。

もう一つは、バリアフリーマップの作製・配布です。「CAN MAP」というものを作りました。開催地として、参加者及び関係者、応援として来場した人にまた来たいと思って貰えるようなきっかけづくりをこの地図で行いました。実

物として1,000部配布しました。それ以外にも、独自にホームページを作成して、そこからダウンロードできる形や、パラ陸の協会にシェアしていただき、事前に参加者の方に届くような形も取りました。協力店舗は16店舗、設置個所は27か所になります。設置場所としては、同封して選手に配布するのはもちろんですが、観光に関わる場所やゲストハウス、協力いただいた店舗にも設置しています。このマップの大きな特徴としては、会場のレグザムフィールドへの行き方を、現地調査して細かく案内をしている点です。それと同時に、独自のアイコンを作成し、スロープや階段、エレベーターがあるか、自動ドアかどうかも全部自分たちでチェックしてマップの中に入れていきます。

効果があったこととしては、大会があること、大会に参加する人が高松に来ることを、店舗の人が把握することが出来たのが大きな結果だと思います。こういう人たちが来るという、心の準備ができます。それから2つ目は、サポート出来ることをお店の方たちが提案して下さったことが、私たちとしても大きく得られたものです。また、私たちU40としても、まちの人たちとの関係性を強めることが出来たことは、大きな結果だと思います。

メディア掲載ですが、6媒体に掲載していただき、ネットニュースやNHKの全国ニュースで放送されたのが、すごく大きな反響でした。これにより、これを見た他の自治体からの問い合わせがあったことを部署の方から聞いています。こういった取り組みを先進的に高松がしているということは、大きなアピールになったと思いますし、逆にこれから来ようとしている障がいを持った方にも大きなアドバンテージになるのではないかと思います。

あと、いろんな意見を私のほうで集約させてもらいました。特段して私たちが力を入れていたことですが、選手から「ネットには出ていない情報が載っていたので、使いやすかった」といった声があり、これは私たちが一番特化したことです。今Googleマップを使えば、結構何でも載っており、Googleアースを使えば写真も映像もみられますが、そうではなくて、住んでいるからこそ分かることを拾っていったことは大きいと感じました。あと段差は、やはりGoogleマップには載らないので、それを載せ、先に知らせるということは、大きな価値があると思います。お店の方から「うちは車いすのお客さん結構来ますよ。任せて。」という心強い意見も貰ったので、私は高松というまちに対して可能性が持てたと思います。個人的な意見ですが、私だけで留めておくのではなくて、皆さんの心にもポテンシャルや可能性があるということ、今一度、心に留めていただければ、私たちがやったことの価値があると思います。

まとめに入らせていただきますが、私たちは新しくマップを作りましたが、これは汎用性があるかといえば、実は汎用性はなく、でも届けたい人に届けるために形にしました。普通のマップであれば、16店舗はちょっと少ないと思うのですが、来た人が正しい情報を使って、それによって可能性を拾っていくことが出来ることに特化しました。何か制作物を作ることは簡単ではありません。全然簡単ではないが、作った後どういったところに持っていくのか、どんな人に届けたいか、その人が手にしてどういうアクションを起こしてほしいか、それを想定することが大事です。それから、情報は集約していたほうが良いのではないかといいところですが、私たちは新しくマップを作りました。新しく作ることは良いことなのか、利用者として投げかけておきたいです。今「ピンマップス」というアプリがあります。これはどんどん口コミで載せていく、障がいを持った方が利

用する地図アプリです。例えばそういった所と一緒にイベントをして、集めていくということも重要ではないかと私は思っています。

最後にU40として、今回、私は個人事業主として、U40に入りました。他のメンバーも団体の方や市役所の方もおられ、市役所の中でも、観光の方、子どもに関するところの方、農家さん、アスリートの方、たくさんいろんな分野の方がおられた。結果的に、私たちが地図やプログラムを作ったときに、とても力になりました。最初は、いろんな人がいてどうなるかなと思ったが、いろんな人が地図を作るときに、地域とつながりがある人は、そこにすごい動きをしてくれたり、市の観光に努めている方は観光に関する情報を合わせてくれたり、メンバーがいなければ出来なかったことがたくさんありました。市役所が持っているメリットや情報をどういう風に活用すれば届くのか、一生懸命みんなで考えることが出来た2年間だったと、私は感じています。

最後に、今回一緒にやったスポーツチームの方、立ってもらって良いですか。このメンバーでプログラムから地図まで作らせて貰いました。すごく良いものと、私も市との関係性や皆さんと今後どんなことが出来るか、色々妄想して苦しくも楽しい時間を過ごさせて貰いました。ありがとうございました。お疲れさまでした。以上です。

【事務局】

ありがとうございました。報告内容についてお気づきの点等ございましたら、挙手にてお願いします。

【市職員（スポーツ振興課）】

今回このパラ陸上を担当したスポーツ振興課の職員として、パラ陸上事業のチームが素晴らしい取り組みをしてくださったことに、心から感謝申し上げます。

この大会自体、高松で初めて開催するということもあり、すごく不安なところもたくさんあり、5月のプレゼンを聞いた時にも、不安しかなかったが、いざ、だんだんと時間が過ぎていき、「CAN MAP」を貰い、本当に良かったというのが率直な意見です。ひとつ物を作るだけでなく、研修事業をやられたことが、大きなポイントであると思いますが、それをやろうとした理由を教えてください。

【委員】

理由としては、私たちが思ってきた関わる人を増やすという目的が一番大きいです。誰もがみんな、見る人であり支える人であると難しいと思っています。関わり方もいろんな年代の人で関わり方があり、活躍できる場所があるということ、知らせていきたかったです。属性や地域、スポーツやボランティアなど興味を持ってくれる人たちにもパラ陸があるということを知りたかったというのが一番大きい理由です。

【事務局】

ありがとうございました。時間の関係もありますので、以上でパラ陸上事業の報告を終了します。それでは続いて、情報発信事業の成果報告についてお願いします。

【委員】

私共、情報発信チームを語る上で、高松市を象徴するハッシュタグについて、ここにいらっしゃる皆さんはご存知だと思いますが、改めて紹介します。「#upTAK」この#upTAKには大きく2つのメッセージが込められていて、1つは高松市観光キャッチコピーの「気持ち高まる、高松。」の言葉にかけている部分と、もう一つは高松市の写真をフェイスブックやインスタグラム等のSNSでアップロードする、上げるという部分にかけて、#upTAKを作成しました。また、世界共通の空港コードである高松市を表す「TAK」を使用し、外国人の観光客にも認知してもらえるように工夫をしました。私共、情報発信チームが目標としたことは、これまでばらばらに発信されていた高松市の情報をこの#upTAKというハッシュタグを使用して、一つに繋ぐことです。そこで、私共のプロジェクトとしては大きく2つのことを実施してきました。1つ目は移動式モニュメントの制作、2つ目はハッシュタグカードの作製です。

まずは移動式のモニュメントについて事業報告させていただきます。こちらが2018年の7月に完成を記念した発表会の様子です。大西市長にもお越しいただきました。今日、実物も持ってきていますが、発表会としては、高松市を代表する3つの場所であるサンポート、屋島山頂、高松空港で実際に発表会をしました。このモニュメントの特徴としては、バラバラにして持ち運びができることです。女性が一人で運ぶことが出来る重さにしています。これは、当日サンポートに運んでいる様子ですが、スタッフのお子さんが一緒に運んでくれたり、組み立ての時にお手伝いをしてくれたりしている様子が映っています。発信するだけではなく、作ることも一緒に楽しんでもらえるようなモニュメントになっています。このモニュメントは、軽自動車ですと箱バン2台で運ぶことが出来、乗用車のハイエースのような車だと1台で運ぶことが出来るように設計しています。このモニュメントは全部で10か所から問い合わせをいただき、残念ながら2つ雨天で中止となりましたが、全8イベントに設置をしました。特徴としては、地域のコミュニティセンターからの問い合わせや、高松市を代表するさぬき高松まつりでの設置、先ほど桑村さんが発表された日本パラ陸選手権大会への設置など、地域から市を代表するイベント、大きな日本全国の大会など、いろいろなところに移動して持ち運ぶことが、多くのお問い合わせをいただくことに繋がったのではないかと考えています。

また四国新聞を始め、読売新聞、時事通信、Jタウンネット、月間ブレーンといったメディアにも紹介していただきました。この様なモニュメント事業だと、神戸の「BEKOBÉ」や富山市の「AMAGING TOYAMA」などがよくメディアで紹介されていますが、そことも比較して紹介されていたのが、持ち運びができるモニュメントが新しいと紹介されていました。今回、その部分も私どもはアピールしたかったので、一定の評価を頂いたのではないかと思います。SNSの反響ですが、2018年7月、モニュメント発表会前のSNSのハッシュタグの投稿数が600件。そこから2019年1月末現在が約2,500件まで投稿が増えています。#upTAKに関しては、SNSで一定量反響があったと思われます。

次に2つ目の事業としてハッシュタグカードの制作を行いました。全部で5パターン作成し、高松市の春夏秋冬を表した代表する写真と1つは高松市の四季を表した写真を掲載し5パターンのハッシュタグカードを作成しました。実は今日

が発表会で、初めて見る方が多いと思いますが、納期ぎりぎりになったわけではなく、せっかくならこの機会に発表しようと思っていました。ポイントとしてはインスタグラムを意識した正方形のデザインをしています。また、裏面には「美しい風景をシェアしよう」と「#upTAK は高松市を象徴するハッシュタグです」というメッセージが、日本語、英語、繁体、簡体、ハングルの 5 言語で掲載されています。また、少し遊び心を加えるということで、#upTAK を切り抜いてもらうと、立体型の形としてこのカードを使って、SNS に投稿できるような工夫をワンポイント加えています。ハッシュタグカードの使い方としては外国人が集まる場所として、高松空港、JR 高松駅、レンタカー、ゲストハウスでの配布を予定しています。また、裏面の QR コードからは高松市観光交流課さんが管理されている外国人向けの観光サイトに誘導し、高松市が届けたい観光情報を伝える役割をこのカードが出来ればと考えています。一番のポイントですが、このカードは先ほど紹介した高松市の観光サイト（Experience Takamatsu）からダウンロードし、誰でも使用できるような形を予定しています。このカードが必要な企業や海外で展示会をするような方々にとって、これをダウンロードし自由に配布してもらえらる仕組みにしました。

最後に、私共情報発信チームでハッシュタグカードとモニュメントの制作の 2 つのことをして、共通して大切だなと思ったポイントがあります。それは、「どこでも」、「誰でも」、「集約」という 3 つのポイント。「どこでも」は、まさに持ち運べるモニュメントにしたことで、高松市主催のイベントや地域のコミュニティ、企業のイベントまで幅広く問い合わせがあり、反響があったのではないかと考えています。またこのモニュメントは持ち運べることで、いろんな景色に溶け込むことが出来ます。場所を変えることでいろんな形で使用してもらえます。また、「誰でも」は、ハッシュタグはもちろん、カードは誰でもダウンロードして使えるような形にしているため、皆さんが手軽に使っていただけるということと、一定の高松市内の情報発信をひとつにつなぐという意識が芽生えたことです。私共の知らないところで名刺やポスター、うちわなどにもこの upTAK の文字が利用されていました。「集約する」ポイントですが、私も常日頃、情報発信をする仕事をしており、大切に思っています。ただ発信するだけではなく、今回 #upTAK が一つのインスタグラムを中心としたハッシュタグの中に情報をまとめていること、また高松市の観光サイトに誘導し、集まっている情報を取得できる。いろんな情報が飛び交う中で集約する場所を作るというのは、今回の事業を通してとても大切なことだと、改めて感じました。今後も、継続して市民が高松市、わが町の情報を発信していくことがとても大切なのではないかと思います。今回の私共の事業は継続することが大事でモニュメントにしてもカードにしても今後も継続して利用できるようにしています。ぜひ、来年以降もこの事業を継続して、いろいろな場所でモニュメントやカードが利用されることを、私共、情報発信チームは願っています。

私はここで発表を終わろうとしていましたが、パラ陸上事業チームがとても良い感じにメンバーを紹介していたので、情報発信チームの皆さん立ってください。各事業の中では一番大所帯のチームでしたが、モニュメントの設置など、みんなの協力がなくてできない事業だったので、本当にメンバーみんなで協力してひとつの事業として 2 年間頑張ってくられました。改めて有難うございました。

【事務局】

ありがとうございました。報告内容についてお気づきの点等ございましたら、挙手にてお願いします。

【市職員（観光交流課）】

私も昨年、業務内外でこのモニュメントをお借りして設置等もさせていただき、ありがとうございました。感心したのは、自分も仕事上情報発信は常にしていますが、いまだに組織が大きくなればなるほど内容もばらつくし、ツールもばらつくと感じていますが、今回 upTAK がコンテンツなのか、ツールでもなく、一つのキーワードなのかなと感じています。コンテンツが変わろうとも、情報発信の方法が変わろうとも、一つ市を象徴するものとしてつなぐことが出来るのは、すごいところに着眼されたと感じました。

質問として、モニュメントが2回は雨天で使えなかったが、8回使えたというのは、想定としてどうでしたか。多かったのか、想定より足りなかったのかをお聞きしたいです。またハッシュタグは今日ここで終わりではないので、今後こうしていきたいということがあれば、頭の中だけでも構わないので、あれば参考までに教えていただきたいです。

【委員】

まず、ご質問の想定よりどうだったかについては、実際はもう少し導入や設置をしたかったが、人員や設置する際にいろんな許可を取らないといけないということもあり、中々私が思ったより簡単にできなかったというのが実際のところではあります。パラリンピックの時はすごく分かりやすかったが、1回設置したのに、何回もその場所は使ってはダメだと移動したことで、会場を右往左往しました。いろんな方の許可をとってやっていかないといけないので、来年に向けては設営の段取りなど、決めていかなければいけないと思っています。

【事務局】

ありがとうございました。時間の関係もあるので、以上で情報発信事業の報告を終了します。それでは続いて、工芸ウィーク事業の成果報告についてお願いします。

【委員】

よろしくお願いします。たかまつ工芸ウィークのロゴを今、映していますが、見たことがある方、いらっしゃいますか。私共は高松における工芸を紹介する期間を設け、いろんなイベントを行いました。

まずスケジュールですが、4月に事業発案を行い、5月には今日と同じ感じでプレゼンを行い、全体のデザインをデザイナーさんと一緒に打ち合わせました。各サイトの事業者や担当者のそれぞれにこういったことをやりたいと、説明に伺いました。今回の事業の肝は、新たに事業も設けるのですが、それ以上にすでに工芸周りのイベントを行っているサイトや施設に声をかけて、一緒にやってもらうということが大きなみそになります。プレスリリースの配布を経て、フラッグロゴも作りました。これは、写真やビジュアルは作ろうと思えば、簡単に作れるが、どなたでもどうとでも使えて、何年でも使える、それがみそで、今回はロゴ

をメインにしようということで、動いていました。パンフレットを作り、実際事業を開催しました。各サイトと施設、その実施内容と結果についてお知らせします。これがチラシの内容になります。左下には高松市内の各サイトを結ぶマップを用意し、各サイトのイベント情報を載せています。

最初は、工芸品の展示です。高松市歴史資料館にご協力をいただき、これまで作り続けられてきた高松の手仕事、伝統工芸品に関して、後継者がいなくて、事業の継続をしていないものなどいろいろあるので、そういったものを展示してもらいました。学芸員の方にお聞きしたところ、サンクリスタル学習という市内の子供たちが学習に来られるので、およそ190人が見たということでしたが、期間がやっぱり短いので、長期間、子どもが来るときにコミットすることが中々できなかったというのが意見として出ました。あと、もう少し、SNSなどを活用したほうが良いのではないかと意見が出ています。

私どものカフェで行いました高松市主催の伝統的ものづくり振興事業として開催されたセミナーです。今回は香川大学創造工学部という新しい学部が出来ましたが、その井藤隆志さんという教授の方に来ていただきました。彼はプロダクトデザイナーの方です。皆さんご存知でしょうか。工業製品をデザインする方ですが、その現場を知っているご本人にいろいろと実例を交えて、ディスカッションをしてもらいました。当日は、35名募集のところ45名ぐらい応募があり、全部ぎゅうぎゅうに入れて話をしましたが、例えば、漆器や、庵治石加工業者、伝統工芸品に関わる人ももちろんですが、高校生の参加がありました。これが結構いて、これから建築家を目指しているのですとか、デザイナーになりたいという高校生の参加がありました。結構遅い時間に行いましたが、そこがとても嬉しかったし、今後の活用になると思いました。参加者の意見ですが、デザイナーは上からやってきて、いわゆる役所の仕事で多額の事業費を貰って、事業者を集めて、デザインだけしてはいさようならと居なくなる人が結構いますが、そういったことではなく、井藤先生は困っている人のもとに行き、デザインでどう事業や地方公共団体が困っていることをクリアするか、そこにデザイナーとしての使命があるとお話いただきました。理想論だけではなく、現実的な数字の話もあり、そういったことも交えながら、本当に現場の話をしていただいたので、ものすごく反響はありました。それも新聞に取り上げられ、これが工芸ウィークのキックオフイベントになったので、工芸ウィークの周知活動に役立ちました。実際、工芸品の販売も行いました。

かがわ物産館 栗林庵では香川県の事業ですが、肥松木工の展示販売をしていたので、一緒にやりませんかとお話をかけました。あと、Kitahama blue stories では「sanukimon 展」がありました。香川県のデザイン会社によるステーションナリーなどを販売しました。まちのシュレー 963 では、高松市の事業である「工芸運動」をやっておりますが、伝統工芸をベースにした新しいモノづくりをしている人たちの展示販売を行いました。結果、工芸ウィーク目的で来ましたよという方は、ちょっと少なかったです。実際に購入する人は、年配の方が多いという残念な結果になっています。あとはワークショップをしたので、そのついでに販売にも興味を持ったという方も多かったです。あとは県内よりは県外の人なのだというのは、どのお店でも言っていました。つまり、皆さんのような県内の方が買っていないということです。これは、声を大にして言いたいことです。

各店舗の店員さんにも話を聞きましたが、民間の店舗同士が手を繋いで一緒に事業をする、これは絶対にあり得ないことなんです。本来であれば。ライバル同士なので。そこまで一緒にやる必要性を感じていません。でも、今回こういうお話をしたことで、これは大事だねと、こういうことをやると今年、瀬戸内国際芸術祭がありますが、そういったところで高松は一丸となって町を盛り上げようとしていることが、一番分かりやすいです。産業としても応援しているのが一番分かりやすいです。だから継続してくれと各お店からも言われています。

あと、一つ大きな事業として工芸の産地ツアーを行いました。1個は庵治石の産地を巡るツアーです。もう1個は盆栽の産地を巡るツアーです。それぞれ人数は少ないが、自転車なので誓約書の問題とかいろいろとあります。ただ、自転車はタイレルさんで、香川のバイクブランドだが、かなりハイスペックの自転車なので、買うとすごく高い自転車を、ほぼ無料の値段で乗れるという、非常に画期的で、かなりお客さんの反響は良かったです。その様子なども、これはお弁当ですが、今回のためにうちのカフェのスタッフが頑張ってお弁当を作って、それをお届けし、疲れたところに、お弁当を食べてくださいというおもてなしもしました。一番下は盆栽コース、自転車で盆栽の郷の鬼無まで行き、盆栽園の見学もしつつ、盆栽園で苔玉のワークショップもしました。これは、先ほども申しましたが、参加者の満足度がすごく違いました。行く前はちょっと怪訝な顔をしている人も居て、産地ツアーってなんだ、というところもあるし、ただ単にハイスペック自転車に乗れるという気持ちだけで来ているだけの人も居ました。でも、実際に帰ってくるとみんな顔が光っているというか、すごく嬉しそうで、盆栽でこんなのを作ったともものすごい勢いで私に報告する方や、私庵治石を彫ったよ、みたいなことを言って下る方が多かったです。特に参加者の中で、特徴的なのが、30代から40代ぐらいの意識高い系というか、暮らし周りのことや伝統的なものに対して、すごく興味関心があり、お金も使いますという方、そういった方に興味があったと思います。ただし、今回行政が行うツアーということで、すごく制約がありました。高松市在住でないとダメという記載をしなければならない。そういった規制があったことで参加者を増やすことが出来ませんでした。これが反省点です。本来であれば観光会社などに受託したうえで、もっと大きなイベントにしていくべきだと思いました。

これは、IKUNASgさんでやられた「工房を訪ねて」。工房に実際に行って、いろいろと体験を行いました。ここで参加者の方に、こういうのをなんでもっと周知しないのかと言われたと、周知をしていたつもりだったが、情報量が多すぎて、中々細かいところまで伝わってなかったのではないかと思います。実際、先ほどお話しましたワークショップをこんな感じでたくさん行いました。かがり手まりや、肥松木工品を使ったワークショップ、和三盆の木型、皆さんどこかで聞いたことあるなというワークショップですが、今回は随時受付を少し多めに作ってみました。この一定の時間であれば、いつ来ていただいても良いですよというワークショップを各サイトをお願いしました。それで観光客とかが、私この時間だと行けるわとパッと行ってパッとワークショップして帰ることができます。そういったことが出来るんです。これは今後も続けていくべきかと思います。あと、1週間だったので週末が1回しかなかったです。やっぱり週末にイベントが集中してしまうので、参加を促すことが中々難しかったのかなと、改善点かなと思っています。

もうひとつ、高松市美術館と一緒にやった共同企画でお茶会をやりました。「起点としての80年代」展という展示会がありましたが、その展示作家である日比野克彦さんという皆さん良くご存知の方でして、段ボールでアートを作る方ですが、この方に段ボールで一から茶室を作っていただきました。これとコラボして出来上がった茶室でお茶会をしました。90年代にバリバリやっていた人たちはJ-TRIP というのをご存知だと思います。J-TRIP バーという内場とかにもあった、いわゆるディスコです。日比野さんはそれをやっていた張本人で、それをもじってJ-TRIP 茶室というのを作りました。かなり奇抜な内装ですが、そこでかなり基本的なお茶会をしました。これも満席で、ちょっと狭いのでどうしても人数は限られるのですが、非常に好評でした。使っている道具もすべて高松の伝統工芸です。漆器の茶碗や地元作家の田淵 太郎さんという陶芸家の作品や理平焼など、そういった、本物を使うということでやりました。茶室製作からお茶会をやってくださる茶人さんと打ち合わせをし、内装はもちろん使うものも考えながら、やっていきました。日比野さんから非常に面白かったと、珍しいイベントが出来たと。このお茶室は高松市に拘留展示というか収蔵されるので、来年も使ってよと言われましたので、来年も使わないといけません。

広報活動では、パンフレットを作りました。先ほども申しましたが、一つにまとめることがミソなので、チラシがどのくらい波及したかによって集客にも差が生じたと思います。あとSNS。#upTAK を使いまくったが、こういうのが若年層にはすごく影響があるが、中々サイトの更新や見てくれている人が、#upTAK に行きつくまでが、大変だと感じました。もう一つ反省点は、メディアを巻き込んでいなかったことです。1個取り上げられた例として、ディスカバージャパンさんに取り上げていただきました。これは、言いにくいですが香川県の招へいで来ていた人を私が捕まえて、こんなのをやるのですよと言ったら、じゃあ記事にしましょうと言ってきて、県には申し訳ないが、取り上げていただくことができました。あと、毎日新聞に非常に細かく取材していただき、私の気持ちやupTAKAMATSU のこともいろいろお話をさせていただきました。

今後の課題として、今回一番大きなものは、どこの事業体もそうだと思うが、事業主催者が一体誰なのだ、upTAKAMATSU って何なのだというのが、結構ハードルになったところがありました。なので、今後続けていくのであれば、創造都市としてイメージアップにつながる事業なので、高松市がやっているよと言ったほうが手っ取り早いです。高松市主催と言え、そうなのだと言え、皆さん納得しやすいです。それともうひとつ、認知度が低い、と元も子もないことを言っていますが、先ほど言った通りSNSだけでは不安です。チラシの効果があるのか、いろいろあると思うが、やっぱりメディアをもう少し巻き込むべきというのが、大きな反省点でした。今後やるのであれば、中々事業のお金が足らなかったのも、出来なかったが、ホームページを作成して、広報上の起点が、必ず必要だという気持ちはあります。もっとお客さんを増やしたいなという時には、今年、瀬戸内国際芸術祭もあるので、工芸を観光資材として活用することはすごく大事だし、キーになります。そういった意味では、公共交通機関ともリンクしながら、さっきのマップも徒歩何分とか、電車だったらどうだとか、そういう交通とのリンクも今後必要だと思っています。そういったいろんな課題もいっぱいありましたが、こういったことをしていなかったのも、事業体の皆さんからもぜひ継続して、特に今年はずっとやって欲しいというお言葉が、たくさん聞きましたので、その

点、よくよくよろしく申し上げます。

【事務局】

ありがとうございました。報告内容についてお気づきの点等ございましたら、挙手にてお願いします。

【市職員（産業振興課）】

まず、この事業を無事に成功させていただき、ありがとうございました。個人的にもこのたかまつ工芸ウィークのロゴマークを非常に気に入っており、素晴らしいデザインだと思っております。先ほどのプレゼンでも触れられていましたが、それぞれの事業で課題や問題点を言っていただきましたが、事業全体を俯瞰的にとらえて、こういった点を苦労したとか、問題だったと思う点と、この事業をやって良かったなど、得したとか、身についたと思うことがあれば、1 つずつでもよいので、申し上げます。

【委員】

苦労した点は、1 個 1 個のサイトさんに納得していただくというのが、こういう事業をやるのですが、そんなことを今までやったことがないので、それ何、みたいなことから、1 個 1 個当たっていかないといけないし、それは誰がやるの、高松市がやっているU40と説明すればするほど、それ何ということになるので、その辺がクリアでなかったのが、難しいところだったと思います。ただ、良いこととしては、高松市のバックがありつつも、民間の私たちU40が動いているので、行政と民間の人間が元々一緒にやっている団体がやっている訳なので、手の繋ぎやすさがあると思います。行政だけがやっている、公平性やいろんな団体との交渉など、結構ハードルがどんどん高くなるのですが、それは意外とクリアだったのではないかとというのが、私の感想です。

【事務局】

ありがとうございました。時間の関係もあるので、以上で工芸ウィーク事業の報告を終了します。それでは続いて、仕事PJ事業の成果報告について申し上げます。

【委員】

仕事PJの発表になります。私は4つの事業の中で、仕事に着目してプロジェクトをさせてもらいました。簡単に紹介させてもらおうと、私自身は東京で四国出身者が数百名集まる企画を毎年やらせてもらっています。高松市には仕事がないのだということ、すごく言われていました。ただ、4年前に私Uターンで戻ってきたが、こっちに帰ってくると働き手が足りないし、後継者がいないと言う。ものすごいギャップに感じ、直面したのでこの仕事プロジェクトをやり始めたきっかけです。これは全国どこでも同じ問題を抱えていると思います。都市部の方が、仕事がたくさんあるのではないかとされています。数のうえでは正しいが、質の面ではそうではないのではないかとというのが、今回の着眼点です。リクナビさんがやった結果によると、地方で働くことに興味がある人が32.6%。地方の転職者に対して情報が不十分だという人が、74.2%。ここに対するギャップが

すぐくある状態です。今回のプロジェクトのゴールは、個人と仕事を有機的に結ぶ仕組みを新しくつくりたいということが、一言でいうとゴールです。どこの地方でも現状うまくいっているところはないと思っています。特に人口規模が 20 万人となっている都市になってくると、1 つの会社に就職を斡旋しようと思ってもなかなかできないです。ここを高松でなるべく早く、かと言って人口減少も進んでいくので、何か新しい仕組みを先に作っていかないといい思い挑戦させていただくのが、今回の流れになっています。

やったこととしては、大きくは 10 月 6 日～8 日に参加者 10 名に集まっていた、新しいプロジェクトを構想するための合宿を行い、2 か月間、実際にそのプロジェクトを走らせた後に、最終報告会をするという形式でやらせてもらいました。今回の視点としては、就業だけではなく起業や副業、承継などにも新しく意識を持ちながら、高松で働くということに志を持っている若者と、こちらの行政、企業、産業が有するニーズを掛け合わせる企画を作っていきたいと考え進めてきました。

まず最初に 9 月の構想合宿の前にイベントを一つさせていただき、こちらスカイプの画面で東京に実際住んでいる 20 代の社会人の人と、こちら高松にある会社、企業の方々とすり合わせ、情報交換のミーティングをさせていただきました。高松の企業が今どういうことを持っていて、東京にいる人たちは、どういう思いを持ちながら、こちらで働くと考えているのか、すり合わせることをしました。11 月には、高松の会社に集まっていた、副業という観点で、どういった副業をいま実践されているのかヒアリングするようなイベントをさせていただきました。この目的は、高松の民間企業が実際、起業や副業、新規事業、あとは外部の人を登用することに対して、どういった課題を持っているかということです。なかなか見えてこない部分があったので、まずはそこを明らかにしたいのが目的です。あとは実際に若い人たち、高松に関心を持っている人たちと、企業のニーズを交換した上で、実現性のあるプロジェクトをしたいということで、このヒアリングをさせていただきました。そのヒアリングの結果等々を通じて、合宿に進んでいくが、実際に 20～30 代の人を中心としたメンバーで 2 泊 3 日、フィールドワークも含まれつつ、議論を深める時間を作りました。参加者は 10 名で、実際、高松在住の方が 4 名と、東京とかに住んでいるの方が 6 名。半々ぐらいの人数になりました。高松プラットフォームラボを拠点に 2 泊 3 日で課題設定とプロジェクトをやっていくかということと、フィールドワーク、グループワークをして、最終日に素案を発表したという形になりました。最終報告会には大西市長にもおいでいただき、参加者がこういった形で、参加していただいた方に対して、実際の企画を発表させていただく形になりました。企画の中身をざっくり簡単に説明します。

これは 20 分のプレゼン資料なので端折りながら説明しますが、こちらとしてやることは、起業や移住ではなくプロジェクトをもとにした関わり方を見出すことが出来ないかというのが、今回の参加者で得られた結論になります。

なぜそうかという、副業や兼業、起業や移住は、一つの選択肢として出したが、ハードルが中々高いです。では、その人たちが香川に、高松に関わっていくことはできないのかという、こういう関りを持ちたいという人が、実際に就労する可能性は極めて高いと思っていますが、そこに関わる人たちが関わる仕組みがないのが現状です。そこに何か手を打てないかということになりました。先ほ

ど言った通り、実際に関わることがないので、どうやるのかというと、ここに対してのアウトプットを出そうということです。今のところはほとんど、人脈など人の繋がり関わることしかできないので、どうやって探したらいいのかが分かっていない、で実際、リーダーになるような人たちは、少しずつ段階を踏まえていくが、ここを探すだけでは、この人達に対する施策がないのでそこに対する手を打ちたいというものです。

副業をしたい人だとかいう人にねらいをつける方法で進めてきました。実際にやることとしては、特に若い人は若いほど、関わり方が実際の収入が多くないので、難しいです。このプロジェクトに関わることがひとつの打開策なのではないかと思えます。プロジェクトベースの関わり方の結論として、WEBサイトを一つ作るということになりました。なので、香川県に関わるプロジェクトやイベント、先ほど本会でも発表がありました。例えば、パラ陸でボランティアをしたいという関わり方や、工芸ウィークでアルバイトを引っ張りたいというところまで、ひっくるめて、高松市で何かしらの関りをすべて網羅する、関わり方を紹介するWEBサイトを作りたいということで、やらせていただきますということになりました。実際にプロジェクトを探しつつ、サポートする選択肢を提示しながら、それぞれの関わり方を作っていく形でやらせていただこうと結論としてはなりました。このような形でWEBサイトは今作っている最中ですので、また別途お伝えできればと思っています。

これから得られたことをまた発表させていただきますが、個人と仕事を結ぶ形で仕組みを作りたいということで、参加者にとっていろいろなニーズに触れながら、高松に関わってもらえればいいなと思ってやってきました。地域側にとってみると、実際にその中で関わる可能性がある人からすると、働く人の予備軍としてうまく捕まえて、関係を作ってくれたらいいかなと思っています。実際に、プロジェクトが続くだったり、業務委託を結んだり、プロボノが生まれる形になればいいかなということをお願いして、させていただきました。その中で、成果としてあげられるのは、ここでは3つ挙げていますが、1つは、実際に高松に継続的に関わる新しいチームが出来たというのが人づくりの部分で大きかったです。今回は長期にわたるプロジェクトだったので、実際に参加した人の中で、特に「かかわるかがわ」の撮影を今3名で継続してやっているが、その人たちが引き続き継続して高松に関わり続けているということは、この先就職や移住の予備軍をちゃんと育成できたことは意味がありました。特に2点目についていうと、行政の施策の中で、起業、副業、承継というのは中々母数が少ないです。この先若い子たちの中でも周りに影響を与えていくような、その人がいることによってもっと人が呼び込めるようなインフルエンサーになる人たちを巻き込むことになると、行政の施策ではなかなか、たくさんの人により公的な動き方をする中では、こういったところの取組は不十分だったかなと思っています。そこに対し、挑戦が出来たというのは一つ成果なのかなと思っています。

あとは、実際のWEBのプラトーンが出来ているところなので、それを実際来年度の高松市の予算を執行せずに稼働することが一つの価値になっているのかなと思っています。個人が実際に実施したプロジェクトで、シェアハウスを作るプロジェクトを持ってきた方がいるが、その方はうまく賛同者を集めて、拡大している形になっています。あとは既存の高松市の施策もやっていけば継承していけるものはあると思います。産業振興課や政策課が一番大きいところにくると思う

が、政策課がやっている企業合宿なども同じようなスキームを使っていけるのではないかと考えています。課題として思ったことはプロジェクトマネジメントが長期間にわたるので、予算の作り方がすごく難しかったです。参加者によってアウトプットが変わる属人的なプロジェクトなので、それを長期に運用することと、あとはどういった費目で予算をつけるのか中々予想できないです。その部分をどうやってこの先行政とやっていくか、ひとつ課題になると思います。あとは、これは私のリサーチ不足の部分もあるが、16年17年の時点では、コンテンツが少なかったが、百十四銀行さんのスタートアップウィークエンドや、起業系のコンテンツが増え始めたタイミングであったので、その辺との差別化を図っていく必要があるのかと思います。あと、企業への就職を促していくということになると、どうしても公平性とのバランスのとり方が難しいので、行政としてどういう運用していくか、この先考える必要があります。

最後になりますが、私たちが最後の発表になるので、最後に何かまとめのスライドを挟めないかと思いましたが、この先人口減少が進んでいく中で、予算が本当に厳しくなってくると思いますが、U40というのが若い人に予算をかけて下さること自体が、そもそも大きな価値だと思います。未来を作っていくのは、子どもや20~30代の人から未来を作っていくので、もちろん予算を削減していくことも大事だが、高松市の税金を作っていく側に上手く育成していくところに、引き続き予算をかけ続けていただくと、僕らもなんとかして結果で答えていきたいと思っています。今回、こうした企画を挑戦させていただいたことにお礼を申しあげつつ、自分の言葉とさせていただきます。

【事務局】

ありがとうございました。報告内容についてお気づきの点等ございましたら、挙手にてお願いします。

【傍聴者】

香川県、地方はやはりどこの業界もやはり人材が不足していて、いい事業があってもそれを継承できないことに大きく課題感を抱えています。やはり、都会にいる方に対して、情報で要求を与えて、それを地方に戻してくるということは、本当に大事なアプローチだと思います。最後のところ、今後の展開についてどうしていったらいいよというのをもう一度要約して何点か頂けないでしょうか。

【委員】

母数を増やしていくというところになると、起業がひっかかるか、副業がひっかかるか、就職がひっかかるかというところのコントロールが難しいです。今回私共は、それを全部ひっくるめてこんなプロジェクトがある、例えば、就職する人であればアルバイトやインターンがあることを掲載できる。例えば、地域系の活動、今日発表していただいた工芸ウィークもそう、パラ陸上も情報発信もそうです。仕事に直結はしないが、何かしらをしたい、というところにはイベントごとのお手伝いを募集するものです。入り口を一つのものに絞らず、いろいろなプロジェクト、で、その関わり方、1日だけから半年物のプロボノ契約まで含めて、網羅しておく必要があると思っています。なので、難しいところではあります。こちら側として1つの提案としては、関わり方を広く、部署まで交換しつ

つ、いろんな入り口を用意しておくということが、行政としては横連携ということになるでしょうか。それをやりながら、高松市全体として、そうした若い人たちをうまく巻き込む取組が、ひとつ大事になってくると思います。それに、今回制作した WEB サイトが、私たちが資産もお手間もかけずにやっていくつもりですが、上手くそこに使っていただきつつ、やれたらいいなと思っています。

【事務局】

ありがとうございました。時間の関係もあるので、以上で仕事 P J 事業の報告を終了します。全体の事業について徳倉会長からお願いします。

【会長】

これから大西市長から総評をいただきますが、その前にいくつかお話をさせていただきます。今日初めていろいろと聞かれた方は、少し分からないところもあると思いますが、少しだけ補足をすると、我々 U 4 0 というのは、創造都市推進懇談会という市の委員会のメンバーです。委員会のメンバーが事業を行うというのは、直接的に難しいので、任意団体の upTAKAMATSU という団体を作りました。そこから市の補助金をいただいて、この 4 つの事業を行いました。そういった立て付けで実施をしています。1 つ大きなポイントとしては、upTAKAMATSU という任意団体は第 3 期のメンバーを中心にやっていますが、今日から第 4 期の新しいメンバーで構成されます。この任意団体としては残り続けることが高松市として 1 つの大きな資産になります。若手のグループが高松市の中に存在をし続けていて、事業を継続していこうと模索をしている途中であるというのが第 1 の大きな取組です。第 2 点目の部分としては、upTAKAMATSU この我々の任意団体、市に予算要求をしたときに、まず今日は 4 つご報告をしているが、元々このように 4 つに集約されたわけではなく、元々は 90 ぐらいのアイデアがありました。それを、我々懇談会の中で相当議論をし、集約していき、本当に創造都市の中で何ができるのか、ということをかなり細かく精査をして、きちんとした形で予算要求させていただきました。そのときは本当にシビアにジャッジをしてください、その代わり通ったものに関しては、我々も必死にやらせていただくという順序をとりました。なので、我々が要求した通り満額通っているわけではなく、当然ながら、他の事業との兼ね合いであるとか、今の市の財政に合わせてこれだけしか出せない、これは出せるという中で、実施をさせていただいた 4 つの事業であります。3 つ目が一つ一つ簡単に補足をしていくと、まずパラ陸の事業の中で、私が実際に声として本当に良かったと思ったのが、パラアスリートの方にこういうことを言われました。「私はこの「CAN MAP」を見て、我々アスリートが受け入れてもらっていると感じた。」どういうことなのかというと、これまでは東京・大阪でしかパラ陸上が開催されない中で、初めて地方都市でやるわけです。高松でやる、こうなったときに、やはり、選手自身も非常に不安があったそうです。それは本当にたどり着けられるのだろうか、食事をできる店があるのだろうか、根本的にお手洗いは大丈夫なのか。ヒアリングをしていくとパラアスリートの方はある程度のことを乗り越えたら何でもできるとおっしゃいながらも、町として受け入れてくれるかどうかはわからないと。でもこの「CAN MAP」がダウンロード出来て、実際に来る前に見られたことによって、高松で競技するということは、僕らをちゃんと受け入れてくれているのだと言ってくださ

ったアスリートの方がいて、スポーツライター方もそれを記事にしてくれました。これは非常に高松市で開催した、また「CAN MAP」を作ったということが非常に良かったなと思った出来事だったので、ひとつ紹介しました。

#upTAK のハッシュタグ、これの元々のアイデアは誰が考えたかという、2年目の市の職員です。これはすごく大きなポイントだと思います。これは今の市の仕組みが、いいとか悪いではなくて、40歳以下のもので自由勝手に意見を出していこうと、90 いくつのアイデア中のひとつでした。高松市らしいハッシュタグというのが、今いろんな町や国にあるが、高松でも作ったらいいのではないかと若い2年目の彼がぼっと言った一言です。それ面白いね、じゃあ作るなら、何がいいだろう、ハッシュタグにしたなら何がいいか、いろんなやり取りをする中で、空港コードがいいのではないかと。「気持ち高まる、高松。」ってあるじゃないかと。こう収斂していく中でこういったものが出来て行って、今、広がっています。やはり若い人のアイデアを具現化する仕組みが高松市の中にできているのが、非常に大事なポイントだと思う。

工芸も仕事も、言わば地域の問題であり社会の問題であり、高松市の問題です。潜在的なこういう問題があるよね、こういうニーズがありそうだよねということ、我々はこの2年間を通して、潜在的になんとかは把握していたものを顕在化することが出来たのではないかと、チームの中で話していました。例えば先ほど、リーダーもおっしゃっていたが、工芸とひとくくりに行っても、私も全然ど素人だったが、それぞれ独立をされていて、連携をすることがなかったものが、upTAKAMATSU によってよくわからないけれども、何か若手の人たちが高松市のために何かをやるのであれば、協力しようとなりました。非常にリーダーには骨を折っていただいたが、かなりいろんな方々に協力をいただき、開催することができました。たぶんこれまでなかったような規模で、関わり方が出来たのではないのでしょうか。仕事の部分に関して、本当に小さな一歩かもしれないが、先ほど、リーダーが一番最初に言っていました。やはり仕事がないと、でも実際地元にはあるのだと。その問題点から、じゃあ20代・30代の人に関われるのかということ、関わりやすい関わり方は、この時代になることで生まれてくるんだろうなというところが紐づいたのが、このU40であり、upTAKの一つの大きな成果であろうと感じています。第4期に向けて第3期と全く同じ事業をするのではないと思うが、並行しながら、また新しい課題を、もっというと顕在化したものを何か解決できるものがあるだろうと、踏み込んでいく事業も実施できたらと考えています。また2年間新しいメンバーで様々なことを進めていきたいと思っています。まずは、今日第3期・第4期混じっていますが、第4期の人こんなことをやるのだとド肝を抜かれている顔をしている人も居ますが、ぜひ、僕らだけでは全く具現化しないものが、様々な方の協力できているということ、会を代表して述べさせていただきます。総評いただければと思います。

5 市長挨拶

【事務局】

それでは、最後に大西市長から御講評をいただきたく存じます。

【市長】

みなさん、こんばんは。

本日はU40プロジェクト報告会ということで、4人の発表者の方がそれぞれ発表され、今、徳倉会長から総評も行われましたので、これで終わりという感じ、私は最後これで締めますと挨拶すればよいのかなと思っていますが、せっかくの機会ですので、一言ご挨拶を申し上げます。

徳倉会長を始め、upTAKAMATSUの皆様方、本当にご苦労様でございました。事業が今年度当初あたりから始まり、5月に事業発表会が行われましたが、それまでに、徳倉会長も言いましたように、いろんなアイデアが出て、それを絞り込んで、しかもそれを事業実施する方法も色々と考えていただいて、私も去年当初あたりのU40、懇談会に出させていただいたが、まず懇談会の開催回数が今まで5回だったのが、3回に削られたというところから始まりまして、この機会を活用しなければならないといったときに、どうすればいいかといったときに、このプロジェクト案が出てきて、実際にそれを仕上げてください、4つに絞り、私も5月の事業発表会に出させていただいたが、いいアイデアがあるなど、あればいいなと思っています、アイデアが出て、それで終わりかと思ったら、実際事業をそれぞれ本格的に実施していただき、しかも今日事業報告会を聞いて、まさにまた改め感心をしたところでございます。ここまでしっかりと事業をやっていただき、しっかりと成果を上げていただいて、その課題を探ってください、次につながるプレゼンをやっていただけたことに対して本当に感謝申し上げます。実際、感激させていただいたのが本当です。発表頂いた各事業リーダーの皆さん、そしてそれぞれ代表の方を始めとした、プロジェクトに関わっていただいた全ての皆様に、心から感謝申し上げたいと存じます。

せっかくですので、それぞれの事業に対して一言ずつ話申し上げます。

まず、パラ陸上事業ですが、まさにこの9月1日・2日に開かれた第29回日本パラ陸上競技選手権大会でして、これは要は、全日本の障がい者の陸上競技の一番の大会です。言ってみれば、陸上競技の日本選手権の障がい者版を屋島でやったということです。これだけ大きなスポーツ大会をやるというのは高松自体も初めてでして、しかも2年後にオリンピック・パラリンピックを控えた中での競技大会でした。本当は今年の9月にやる予定だったのですが、さすがに本番のパラリンピックの前は東京でやらないといけないだろうということで、高松はもう一年前にやってくれと。予定よりも1年早まって去年やったので、準備等が本当に大変でしたが、そういった中で受け入れ体制としてボランティアの育成講座と「CAN MAP」を作ろうということ、アイデアを出していただきました。まさに、U40の中にも実際のパラ陸上の選手など、出場する選手も居たり、それで話が進んでやっていただいたことは本当に感謝申し上げます。リーダーが言いますように、これをやることによって高松という町が障がい者の方々を受け入れられる町である可能性があります。しかも屋島の陸上競技場がパラ陸上のメッカとしてアピールできるような大きな可能性を持っていると、我々として自信を持つことが出来たので、良かったと思っています。それともうひとつ、これは触れられませんが、中野保育所の子供たちが作った横断幕を広げながら、実際にパラ陸上選手権大会の時に、小・中学生あたりを中心に、たくさんの子供たちがやってきました。子どもたちは、例えば車いすの選手が一生懸命手で車いすを漕いでトラックを走っているのを見て、本当に感激していました。それは本当に大きな教育効果があったのではないかと考えています。大会の成功に本当に大きく寄与していただいたことに感謝申し上げます。高松はパラリンピックに向けて共

生ホストタウンというのにも指定されておりますので、これからも障がい者にやさしい街づくり、心のバリアフリーも含めてそのあたりを一生懸命やってまいりたいと思っています。今後ともいろいろと協力をお願いいたします。

それから#UPTAK のハッシュタグ事業ですが、これもアイデアが素晴らしいです。ハッシュタグを活用してみんなの心を一つにまとめる、しかもアップというのが、「気持ち高まる、高松。」とか、記事をアップするに繋がっている。あと、TAKを使ったのが素晴らしいアイデアだったと思います。TAKが高松空港だと世界中これしかないわけです。世界の中で、TAKで表される空港は高松空港しかないわけですので、全て高松だというのが確実にわかるわけです。この省略された記号の中で、集約ができる、集約することによって、情報は発信としてすごい力を持つということだと思っています。しかも、モニュメントも。私は「BEKOB」が羨ましいと最初思ったが、これを作っていただいて、神戸に勝ったと思っています。これからは意識をしてどんどん情報発信してもらえれば幸いです。

3つ目の工芸ウィーク事業。高松市の場合、創造都市づくりの中で文化芸術・スポーツあたりは割と表に出されるが、伝統工芸は本当に大事にしていきたいと思っています。そのために伝統的ものづくり振興条例をつくり、特に庵治石、盆栽、香川漆器あたりを中心としながら、かがり手まりや和三盆の木型など、そういったものを全てどんどんPRしていきたいが、それがどんな方法が良いかいろんな事業を行っているが、例えば工芸のグループがやられました、自転車サイクリングツアーで庵治石のところに行ったり、盆栽を見たり、ワークショップをやられて非常に満足度が高いとのことでした。まさに、今はモノ消費よりコト消費と言われているが、コト消費を工芸品を使って、やられるということ、これも大きな可能性があると思います。しかも、美術館の日比野克彦さんの茶室ですが、あれも収蔵品として確保しておりますので、今後ともそれを中心としながら展開していただきたいと思います。工芸ウィークの事業を聞いて、私、女木島と玉藻公園を中心に、2012年と2014年に瀬戸内生活工芸祭をやっています。いろいろと事情があって2回で終わったが、それを惜しいなと思っていたら、こういった動きが出てきて、今後工芸ウィークについては是非事業を継続して実施してほしいという声が非常に強かったといいましたが、ぜひ市も応援するというか、主体になるという話でしたが、中心的に関わりながら、継続できたらと思っています。

それから仕事PJ事業ですが、まさに仕事という本質的なものに取り組んでいただきました。移住生活するにしても、その人が生きていく上でもありますが、仕事をどうにか、上手い具合に関わりを持たせながら、仕事を通じて高松と関わらせる、あるいは引き付けられないかということをございまして、実際に色んな人にいろんなアイデアを出していただきながら、合宿をやって、皆の議論を聞きながら、関わり方について取りまとめていただいて、最終報告会には私も行かせてもらいましたが、本当に短期間の間にいろいろと練られたいいアイデアがあるなと思いました。それでこれで終わりかなと若干危惧というか思ったが、次につなげて行って、市の予算もそんなに使わずにちゃんとやれますよと言ってくれましたこと、本当に大きく期待をして見守っていきたくないと存じます。できるだけ市もバックアップして関わっていきたくと思っています。今から仕事でも多様性は大事だと思っており、色んな働き方ができる、色んな関わり方が出来る、色ん

な楽しみ方が出来る、だから住所も高松においてもらう必要はなくて、今は「複住」と言われる方も多いが、そういうのがあっていいと思います。そういった多様性のある生き方、仕事の仕方が高松ではできるというところを上手く見つけて、仕組んで、それをPRできればと思います。

以上、それぞれ簡単に話をさせてもらいましたが、本当にそれぞれが良く練られて、しかも、ここまでやっていただけたこと、本当に私の予想をはるかに超えており、感激をした次第でございます。改めまして4人の代表の皆様、またそれぞれのプロジェクトに関わっていただいた upTAKAMATSU のメンバーの皆様から敬意と感謝の意を表させていただきたいと存じます。

最後に、先ほど会長から話がありましたが、今日から新しい創造都市推進懇談会、U40の第4期の活動が始まるということで、第3期から引き続き残っておられる方も多くいらっしゃいますが、ぜひともまた新たないろんなアイデアを出していただき、高松をより豊かな、より面白い、より楽しい街にさせていただけるように、いろんなアイデアを出しながら活動をやっていただけると幸いに存じます。そのことを皆様方をお願いし、私の講評に変えさせていただきます。どうも、お疲れ様でございました。

6 閉会

(事務局から事務連絡の後、閉会)